

1 研究の概要

(1) 研究主題

児童生徒が互いに自他のよさを認め合う学級集団づくりを目指して
ー児童生徒がもつ「強み」に着目した交流活動の実践ー

(2) 主題設定の趣旨

<児童生徒の現状>

近年の児童生徒を取り巻く社会問題として、いじめや不登校、暴力行為などが挙げられます。その遠因として、少子化や核家族化、地域社会における人間関係の希薄化が進む中での、児童生徒の対人関係の未熟さがあると考えられます。平成29年度文部科学省「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」によると、いじめの認知件数は平成28年度から平成29年度にかけて、全国では323,143件から414,378件へと28%の増加、佐賀県においては556件から833件へと50%の増加となっています。また、不登校についても、小・中・高等学校共に、本人が「学校における人間関係」に課題を抱えており、その理由として「いじめを除く友人関係をめぐる問題」が最も多いという結果が出ています。

<自己肯定感を高める必要性>

小学校学習指導要領解説特別活動編には、児童の実態として「自分に自信がもてず、人間関係に不安を感じていたり、好ましい人間関係を築けず社会性の育成が不十分であったりする状況が見られたりする」⁽¹⁾とあり、自分に自信をもたせるための話し合い活動や望ましい集団活動の必要性が挙げられています。また、生徒指導提要では、一人一人の児童生徒のよさを生かした指導や、児童生徒が互いに考えを交流し自他のよさを学び合う場を工夫することが、児童生徒の自己肯定感を高めることやよりよい人間関係の構築につながるとしています。これらの指摘は中・高等学校においても同様であり、児童生徒の発達に段階に応じた自己肯定感を高める取組が必要であると考えます。

<本研究のねらい>

当教育センターの平成 26・27 年度「プロジェクト研究」において、いじめ等の未然防止のための授業モデルとして「ピア・メディエーションに関する活動プログラム」（以下、活動プログラム）を作成し、平成 28 年度には、活動プログラムを効果的に活用するための授業実践を行いました。活動プログラムの授業実践において、日頃から自己肯定感が高く積極的に友達と関わることができ、授業の中でも積極的に友達と活動したりシェアリングの場面で進んで交流したりしていた児童生徒の方に、意識、行動の両面でより望ましい変容が見られました。このことは、児童生徒の自分に対する自信や信頼などといった、自分を肯定的にみる資質の有無や程度が、活動プログラムの学習効果を引き出すことに関係していることを示唆すると考えます。このことから、このような児童生徒の心理面を取り扱う授業実践においてその学習効果をより高めるためには、実践前に児童生徒の心理面におけるレディネス（学習に必要な準備状態）を高める必要があると考えます。そこで、児童生徒の自己肯定感を心理面におけるレディネスの一つとして捉え、自己肯定感を高めるための手立てを探る研究を進めていくこととしました。

平成 29 年度の個別実践研究では、児童生徒の自己肯定感を高めるための手立てとして、よさを「強み」（ストレングス）と捉え、児童生徒がもつ「強み」に着目して「強み」を生かすストレングスアプローチを取り入れることとしました。本人に備わっているもの、すなわち「属性（性質・性格）」「才能・技能」「関心・願望」に焦点を当て、児童生徒が自分や友達の「強み」を知ったり互いの「強み」を伝え合い認め合ったりする交流活動を仕組むことにより、児童生徒の自己理解、他者理解を深

めていきたいと考えました（図 1）。そこで、児童生徒の実態と発達の段階を踏まえ、児童生徒が自分や友達の「強み」を知ったり互いに自他の「強み」を伝え合い認め合ったりする授業モデルと授業資料等を作成し、小・中・高等学校全ての校種において授業実践を行いました。授業実践を通して、書くことに対する苦手意識がある児童生徒への配慮や書く時間の確保及び授業以外における自他の「強み」を知ったり互いに自他の「強み」を伝え合い認め合ったりする活動の継続的な取組といった課題を得ることができました。

これらのことから、本研究では、研究委

員の協力の下、昨年度作成した授業モデル等の内容を精選し、「強み」に着目した交流活動を取り入れた「『強み』に関する活動プログラム」として改めて作成することとしました。小・中・高等学校において、児童生徒がもつ「強み」に着目した交流活動の実践を通して、自己肯定感を高めるとともに、児童生徒が互いに自他のよさを認め合うことのできる人間関係を築こうとする学級集団を形成することにつながると考え、本主題を設定しました。



図 1 研究構想図

(3) 研究の目標

小・中・高等学校において、児童生徒の実態や発達の段階に応じた児童生徒がもつ「強み」に着目した交流活動の効果的な進め方を探ることにより、児童生徒が互いに自他のよさを認め合う学級集団づくりを目指す。

(4) 研究方法

- ア 先行研究や文献における自己肯定感やストレングスアプローチについての理論研究
- イ 小・中・高等学校における集団や個人についての実態把握を踏まえた「『強み』に関する活動プログラム」の作成
- ウ 小・中・高等学校における「『強み』に関する活動プログラム」の実践及び考察

(5) 研究内容

- ア 自己肯定感やストレングスアプローチについての先行研究調査や文献研究を行いました。
- イ 小・中・高等学校において、集団や個人についての実態把握を行い、実態や発達の段階に応じた「『強み』に関する活動プログラム」を作成しました。
- ウ 小・中・高等学校において、作成した「『強み』に関する活動プログラム」を実践して児童生徒の変容を考察し、「『強み』に関する活動プログラム」の有効性を探りました。

《引用文献》

- (1) 文部科学省 『小学校学習指導要領解説特別活動編』 平成 20 年 p. 3